

女子における原発性膀胱憩室腫瘍

久留米大学医学部泌尿器科学教室（主任：重松 俊教授）

重 松 俊 朗
向 田 正 幹
江 藤 耕 作
宮崎県立日南病院泌尿器科
中 川 克 之

PRIMARY TUMOR OF THE BLADDER DIVERTICULUM IN FEMALE

Shunro SHIGEMATSU, Masaki MUKOUDA and Kosaku Eto

From the Department of Urology, Kurume University School of Medicine, Kurume, Japan
(Director: Prof. S. Shigematsu, M. D.)

Katsuyuki NAKAGAWA

From the Urological Department, Nichinan Prefectural Hospital

Primary tumor of the bladder diverticulum was found in a 72-year-old female who was seen with complaints of gross hematuria, cloudy urine and fever. Histopathologically the tumor revealed adenoacanthoma. It was the first in our country.

緒 言

膀胱憩室の原発性腫瘍は Willams (1883) の剖検記載に 始まるとされ、臨床例での報告は Young (1903) が最初である。本邦では国分・

安達 (1951) の剖検例を最初とし、女子における最初の報告は土屋ら (1961)¹⁾ により記載されている。それ以後私たちが集めたかぎりでは5例で²⁻⁵⁾、自験例を入れても6例にすぎない (Table 1)。

Table 1 女子における膀胱憩室腫瘍

No.	年度	報告者	年齢	臨床症状	発生部位	確定診断	手術術式	病理組織診断	合併症	予後
1	1961	土屋・峰 日東寺	69	尿混濁・自然排尿・不能	左尿管口の 上外側	手術	憩室全摘出術	扁平上皮癌	憩室内結 石・憩室 (5コ)	
2	1962	大北・宮本	25	肉眼的血尿・頻尿・ 排尿痛・残尿感	頂部より 後壁の左 側寄り	手術	憩室全摘出術	良性奇形腫		
3	1965	河崎・和田	44	頻尿・尿混濁	後壁頂部	手術	腫瘍摘出術	粘液性 嚢胞腺腫		
4	1968	堀米・菅原	59	肉眼的血尿・頻尿・ 排尿時終末痛	右尿管上 部	膀胱鏡	憩室全摘出術 右尿管膀胱 新吻合術	紡錘形腫 細胞肉腫		治
5	1971	重松・山下 江藤	46	肉眼的血尿・排尿 痛・夜間頻尿	後壁	膀胱鏡 膀胱造影	憩室全摘出術 膀胱部分 切除	腺癌(膠様癌)		約1年後 悪液質に て死亡
6	1971	自験例	72	尿混濁・血尿・発 熱・終末時排尿痛 ・腰痛・二段排尿	左後壁	膀胱鏡	憩室全摘出術 膀胱部分 切除	腺表皮癌		術後63日 目脳出血 にて死亡

最近、私たちは病理組織学的にきわめてまれな女子の原発性膀胱憩室腫瘍を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：宮○カ○ヨ 72才 女性

初診：1970年8月25日

入院：1970年8月27日

主訴：尿混濁，血尿，発熱

家族歴：特記すべきことはない。

既往歴：さいさい膀胱炎を起こしていた。

現病歴：1970年8月中旬ごろより尿混濁，血尿，発熱，終末時排尿痛，腰痛，二段排尿などの愁訴で当科を受診し，膀胱鏡にて膀胱憩室口の周縁上に米粒大の腫瘍を指摘され，膀胱腫瘍，膀胱憩室の診断のもとに入院した。

入院後，TUCを施行し，その後MMC膀胱内注入療法を施行し，同年12月23日退院した。そのご4日目に悪寒戦慄を伴う発熱（39.5℃）があったが2～3日で軽快した。その後も微熱，食欲不振，尿混濁などが持続するため1971年1月21日再入院した。

現症：体格中等，栄養やや不良，体重43.5 kg，身長150 cm，体温37.0℃，脈搏76正，緊張良好，血圧180/120 mmHg，発疹，浮腫，黄疸などは認めない。全身のリンパ節は触知しない。眼瞼結膜は軽度貧血，眼球結膜に黄疸はない。

聴診により心尖で弱い駆出性雑音があり，また，第I音亢進がある。肝，脾を触知しない。両腎は触知するが圧痛はない。膀胱部に軽度の圧痛がある。

諸検査所見

i) 尿所見：肉眼的血尿で，沈渣は赤血球，白血球多数あり，グラム染色でグラム陰性桿菌，グラム陽性球菌，膿球多数がみとめられる。

ii) 血液所見：赤血球数 $312 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，白血球数 $2,000/\text{mm}^3$ ，血色素量 12.2 g/dl，ヘマトクリット値 28%，白血球分類では好酸球 2%，桿状型 2%，分葉型 33%，リンパ球 53%，単球 10%，血沈中等価 56。

iii) 腎機能検査：残余窒素 24 mg/dl，血清電解質 Na 142 mEq/l，K 4.1 mEq/l，Cl 100 mEq/l，Ca 4.6 mEq/l。

iv) 血液化学的検査：GOT 9 単位，GPT 8 単位，アルカリ性フォスファターゼ 6.0 単位，総蛋白 6.1 g/dl，総 A/G 比 1.06，Al 51.5，G- α_1 3.5，G- α_2 10.5，G- β 10.5，G- γ 21.5%。

v) 膀胱鏡所見：容量は 200 ml 以上で膀胱粘膜は発赤し，やや左後壁に憩室口があり，憩室口は隆起

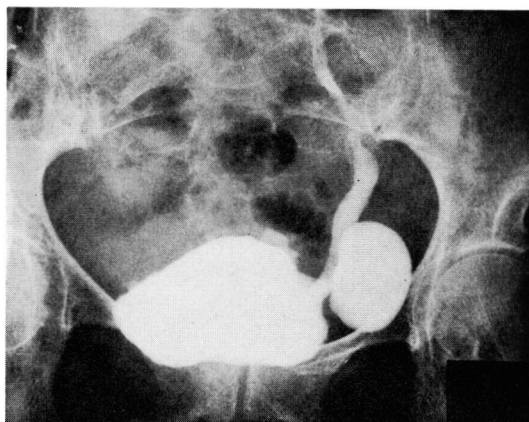


Fig. 1 膀胱造影

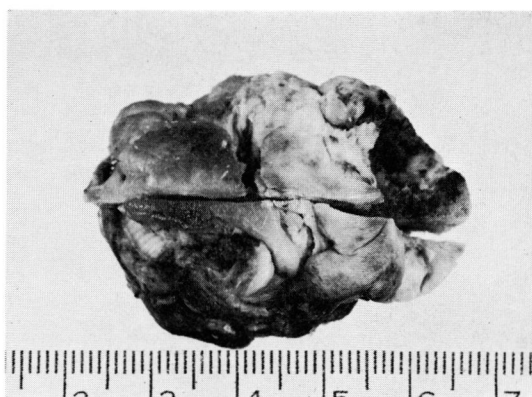


Fig. 2 摘出臓器

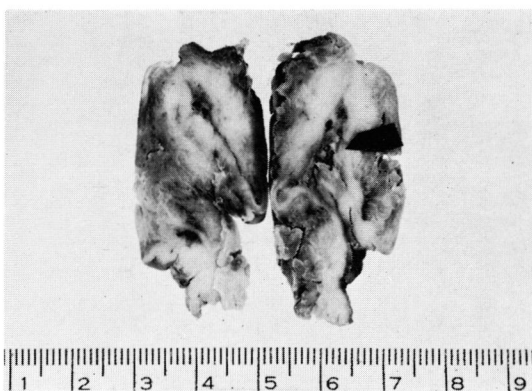


Fig. 3 摘出臓器

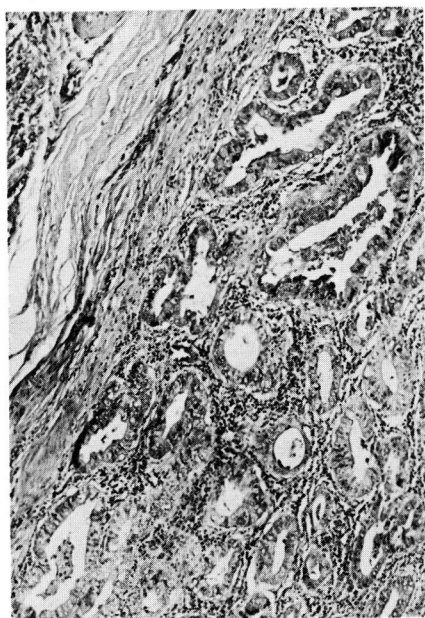


Fig. 4 H・E 染色 (5×20)
腺癌の部分を示す



Fig. 5 H・E 染色 (5×10)
類表皮癌の部分を示す

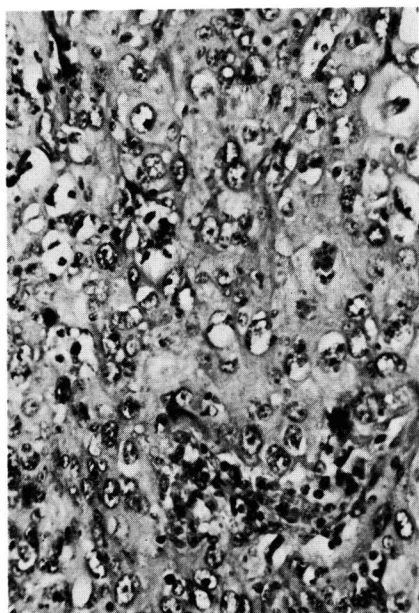


Fig. 6 H・E 染色 (5×40)
類表皮癌の部分を示す

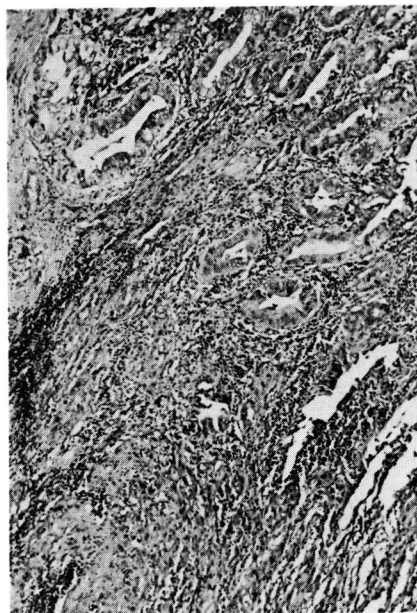


Fig. 7 H・E 染色 (5×10)
腺癌の部分と類表皮癌の混在部を示す

し、ところどころに白苔の付着を認めた。

vi) X線学的検査所見：腎膀胱の単純撮影では結石陰影はなく、IVP像では左腎に慢性腎盂腎炎を思わせる像を認めた。膀胱造影像では左側壁に3.5×5cmの憩室像があり、左尿管より腎盂までの逆流現象を認めた(Fig. 1)。

以上の検査成績から膀胱憩室腫瘍の診断を下しえた。

治療および経過：本症は第1回目の入院時にただ小さな膀胱腫瘍としてTUCを施行し、第2回目の入院ではじめて、膀胱憩室腫瘍と診断されたのである。入院後全身状態と高年令のためただちに手術ができず、テスバミン、MMC等の膀胱内注入を施行した。1971年5月17日、腰麻のもとに、下腹部正中切開で骨盤腔に達し、膀胱を開くに憩室内に腫瘤を認め、また憩室壁は憩室口まで硬く肥厚していた。この憩室は周囲と軽度のゆ着があり、剥離するのにやや困難であったが膀胱憩室全摘出術、膀胱部分切除術を施行し手術を終わった(Fig. 2, 3)。術後経過は良好であったが、高血圧のため脳出血を起こし、術後63日目に死亡した。

病理組織学的所見

肉眼的所見：憩室壁は高度に肥厚し、その大部分は腫瘍組織で占められているが、外膜に向かって破壊、浸潤などはみられなかった(Fig. 2, 3)。

顕微鏡的所見：腺腔形成の明瞭な部位では円柱状の腫瘍性腺上皮が一層あるいは二層に不規則に配列して不規則な腺構造を形成している。間質にはリンパ球の細胞浸潤がみられた。また、PAS染色ではPAS陽性物質が腺細胞ならびに腺腔内にみられた。Fig. 4はその腺癌の部分を示している。いっぽう大小不同の多形成を示す腫瘍細胞の不規則集合からなる癌胞巣が、たがいにもみつに接し、その間に主としてリンパ球浸潤を伴ったわずかな間質がみられる。癌巣内には空胞形成や癌真珠形成は認めないで、核分裂像、空胞変性がみられた。Fig. 5, 6はこの類表皮癌の部分を示している。Fig. 7は腺癌の部分と類表皮癌の混在した部分である。以上のごとく腺癌と類表皮癌の混在を示す点から腺表皮癌(adenocanthoma)と診断した。

考 察

膀胱腫瘍における腺癌の発生はFriedman & Ash (1959)⁶⁾によると腺性膀胱炎説、異個体発生説、尿管管説などがある。McDonald & Thompson (1948)⁷⁾は膀胱癌274例中純粋な腺癌36%、混合型(腺癌+扁平上皮癌5.8%、腺癌+移行上皮癌5.1%)10.9%計14.5%が腺状構造を有すると報告した。また、辻も尿管管以外の本来の膀胱粘膜から純粋な腺癌が発生

Table 2 女子(6例)における病理組織像

性 状	例 数	種 類
良 性	1	奇 形 腫
	1	粘 液 性 囊 胞 腺 腫
悪 性	1	腺 癌 (膠 様 癌)
	1	扁 平 上 皮 癌
	1	肉 腫
	1	腺 表 皮 癌

することはきわめてまれで、通常は移行上皮型、あるいは扁平上皮型と腺状構造とが混在していると報告した。

前述したように本邦の6例における病理組織像の内訳は、扁平上皮癌、良性奇形腫、粘液性囊胞腺腫、紡錘形細胞肉腫、腺癌(膠様癌)、腺表皮癌の各1例ずつである。これらを良性、悪性に分類すると、良性2例、悪性4例となる(Table 2)。

重松ら⁹⁾は膀胱憩室腫瘍の本邦38例を集計し、男性32例、女性5例、不明1例で、その組織学的分類では移行上皮癌16例(42.1%)、扁平上皮癌10例(26.3%)、肉腫5例(13.2%)、その他7例(18.4%)で半数以上が移行上皮癌、扁平上皮癌と報告した。腺癌の報告例は重松ら⁹⁾の1例をみるのみである。今回の症例は腺表皮癌(adenocanthoma)でこれまでの文献的報告をみない。女子のばあいは移行上皮癌の報告例がなく、扁平上皮癌の1例のみで、重松らの38例の集計によるとはるかに少数であるが、男性のばあいは腺癌、良性腫瘍の報告がなく、女性にあるということは、辻ら⁹⁾のいうように未報告がかなりあるからと簡単に考えてよいものであるか、私たちは疑問に思うものである。

結 語

私たちは72才女性の原発性膀胱憩室腫瘍について、いささかの文献的考察を加えて報告した。本症例は病理組織学的には腺表皮癌であった。

稿を終えるにあたり、ご指導ご校閲をいただいた重松俊教授、また病理学的検索で多大のご援助を賜った当大学第2病理学教室、中島輝之教授、谷村見講師に深謝する。

文 献

- 1) 土屋文雄・ほか：多発性膀胱憩室切除術の数例。日泌尿会誌，52，95-95，1961。

- 2) 大北健逸・宮本恒弘：膀胱原発性皮様腫（良性畸型腫）の1例。臨皮泌，**16**：19-22, 1962.
- 3) 河崎屋三郎，和田一郎：膀胱憩室に発生した粘液性嚢胞腺腫の1例。日泌尿会誌，**56**：116-116, 1965.
- 4) 堀米 哲・菅原剛太郎：膀胱憩室肉腫の1例。臨泌，**22**：129-134, 1968.
- 5) 重松俊朗・ほか：膀胱憩室腫瘍（腺癌）の1例。泌尿紀要，**17**：690~696, 1971.
- 6) Friedman, N. E. & Ash, J. E.: Atlas of tumor pathology, Section VIII-Fascicle 3Ia Tumors of the urinary bladder F3I, 50-51. National Academy of Science-National Research Council, Washington, D. C. 1959.
- 7) McDonald, J. R. & Thompson, G. J.: Carcinoma of the urinary bladder: A pathologic study with special reference to invasiveness and vascular invasion. J. Urol., **60**：435-445, 1948.
- 8) 辻 一郎：日本泌尿器科全書，**5**：62-63, 1960.
- 9) 辻 一郎・ほか：原発性膀胱憩室肉腫。癌の臨牀，**1**：284-288, 1955.

(1971年11月1日特別掲載受付)

お 知 ら せ

最近，大学の系列によらない泌尿器科医の公募が全国的にふえつつあります。小誌では泌尿器科医公募の記事を無料で掲載することになりました。ぜひご利用ください。

あて先は，泌尿器科紀要編集部で，文書に限ります（電話は不可）。